な期間での調査ではあったが、多くの方々の協力を得られ、大きな成果を挙げた。手伝っていただいた全ての方々に、言葉では言い尽くせないほど感謝している。

写真３　ランボ教授が研究実績を紹介

写真４　フランス国立高等研究院の博士後期課程の学生達と交流

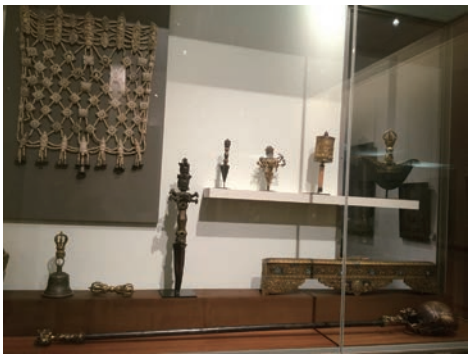

写真５　ギメ東洋美術館に展示された法器

写真６　ギメ東洋美術館に展示された仏画

カナダ・バンクーバーにおける歴史的建造物保存活動に関する研究

姜　明采
（工学研究科博士後期課程）

カナダ・バンクーバーは、大自然と都心の魅力を併せ持つ景観都市の一つとして知られている。また、町並みにはヘリテージビルディング（築20年以上で文化的伝統価値があるとヘリテージ委員会に認定された建物）が溢れており、歴史的環境や遺産を保全しようとする動きが活発に行われている。そこで今回は、バンクーバーにおける歴史的建築物の見学及びそれらの保存実態を把握・検討するため、派遣調査を志望した。

2017年２月８日～28日までの約３週間、カナダ・バンクーバーのブリッティッシュコロンビア大学アジア学科への派遣研究員として滞在し、バンクーバー市内の建築物の見学及びUBC図書館での資料調査を行った。様々な移民者の文化を融合して一つの都市を形成しているバンクーバーの特質は、建築そのものにも多く反映されており、住居・商業・オフィスという三つのエリアに大きく分けられていた。各エリアの建築様式には以下の特徴が見受けられる。

まず、商業エリアには左右対称の要素や入り口に配置したオーダーなど、様式建築の影響を受けた建築が多く、コンバージョン建築として活用している様子がうかがえた。また、オフィスエリアには、アール・デコ様式の影響によって細部に幾何学的装飾を取り入れた建築物と、ガラス張りのモダンデザインの建築物で、２種類の超高層ビルが見られる。そして住居エリアには、多くがヘリテージビルディングとして指定されており、そのデザインは切妻屋根や寄棟屋根などを用いた躯体の正面入口にオーダーを設けるなど、様式建築に多く影響を受けたファサードが印象的であった。こうした住居エリアの建築のうち、今回はロウディー邸を見学した。この建物は、BC州議事堂を設計するなど、カナダ・BC州を

中心に活躍した建築家・フランシスラッテンベリーがバンクーバーで初めて設計した建築物と知られている。

ロウディー邸は1893年、印刷業者であったロウディーの家族のために建てられた住宅で、左右非対称の躯体に急勾配の切妻屋根や寄棟屋根を用いた2階建ての構成に、ベランダとベイウィンドウ、角塔、円錐屋根などを加え、また、ポーチの柱と軒、煙突をそれぞれ異なる色で塗るクイーンアンリバイバル様式を基調としている。1970年代以後、この建物一帯を公園化する計画のためにロウディー邸は壊すことになったが、市民の反対により既存の建物は保存することとなった。現在は博物館として一般公開しており、ボランティアが常住して建物の案内を担当することでその保存活動に関わっている。

このように、市民の約96.6%がヘリテージビルディングを守るべきだと考えているなど、バンクーバーにおける建築の保存には一般の人々が積極的に関わっている様子がうかがえた。こうした保存活動に最も精力的に取り組んでいる団体は、「バンクーバー・ヘリテージ・ファウンデーション」である。1992年に設立されたこの団体は、建築物の見学や町歩き、ワークショップといった様々な活動や、ヘリテージビルディングを地図に表記してホームページやアプリケーションで公開するなど、建築の保存活動の流れやこれまでの業績を分かり易く説明している。残念ながら、2月はほとんどイベントが行われなかったのだが、そんななか幸いにも、21日に行われたスタンレーパークのレクチャーに参加することができた。レクチャーを担当したランドスケープ・アーキテクトのアドリエヌ・ブラウンさんは、スタンレーパークの造園当初、トーテムポールを飾った背景から現在に至るまでの歴史について説明し、これからも緑豊かな公園を守っていくためには人々の協力が不可欠であると力説した。その後にしばらくの間、70名ほどの参加者がこれからの公園のあり方について自らの意見を語っており、こうした人々の積極的な活動によって今のようなきれいな町並みができたことを実感した。

バンクーバーは、先住民族のトーテムポールからガラス張りのモダンな超高層ビルに至るまで、多様な歴史文化を抱いた都市である。これまでその歴史が守られてきた背景の一つとしては、人々が都市のアイデンティティを確立する方法として建築の保存に注目していたことが推察できる。こうしたバンクーバーの事例を参考にして、今後日本及びアジアにおける建築の保存をどのように展開すべきかについて考えてゆきたい。

今回の調査は、リーディング・ブレイクの期間中であったにもかかわらず、アジア学科の許南麟先生の許可により受け入れていただくことができた。また、チューターの金さん、ホームステイ先のホストファミリー、神奈川大学非文字資料研究センターの皆様から多くの支援を賜った。お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。

写真1　ロウディー邸

写真2　ロウディー邸のダイニングルーム

写真3　レクチャー

写真4　レクチャー後に討論する人々